ごみと人間の社会学

――「ごみの量の多さ」の社会文化的分析――

大阪大学大学院　石井由紀

1.　目的

「ごみの量が多い」ことの要因を，ごみと人間の関係性への着目から明らかにする．

現在のごみ問題の特徴は，最終処分場確保の困難性にあり，その要因の一つは高度経済成長期からの大量生産, 大量消費に伴うごみの増量であることが指摘されている（寄本 2003, 鵜飼 2000）．しかし歴史的にごみ問題を見ると，ごみの量に関する問題は奈良時代から表出しており（川添 2003），ごみの量が多いという現象は，大量生産，大量消費の切り口のみでは説明できない．ゆえに本報告では，これまで語られてきた経済的観点ではなく，文化的観点，特にごみと人間の関係性に着目して分析を行う．

2.　方法

生活情報誌，女性誌等の雑誌を通して，高度経済成長期を中心とした戦後のごみと人間の関係性を分析する．

現在のごみと人間の関係性が構築されたのは，プラスチックをはじめとする「燃やせないごみ」によりごみの質が変化し，現在的な収集方法が定着した高度経済成長期以降である．従って，変化点としての高度経済成長期を中心に戦後の関係性を概観する．対象とするごみは日常的に家庭から排出されるごみ，すなわち一般廃棄物の生活系ごみとすることから，家庭生活および，ごみとの関わりが深いと考えられる女性に着目する．当時情報ツールとして大きな役割を果たした雑誌を用いる．具体的には「主婦の友」,「暮しの手帖」,「女性自身」,「女性セブン」,「微笑」等を取り扱う．

3.　結果

不要物概念の誕生とともに，ものの所有の考え方が変化する様子を明らかにした．

狭い住宅事情，住宅の改修・引っ越しの増加，ものの増加に従って，まだ使えるのに使わない「不要物」の概念が表出した．不要物は往々にして「もったいないから」あるいは「思い出の品だから」という理由で捨てることがためらわれ，「ものに自己を投影する」かたちで所有している様子が明らかとなった．

4.　結論

以下二点を結論づけた．一点目は，現在はものに自己を投影する所有の仕方をするため，大量のものを所有し，ごみの量も増加していること．二点目は，ごみを廃棄するという行為が人間関係を豊かにしているために，ごみの量も増加していること．

以上二点の理由から，現在ごみの量が増加していることを明らかにした．

文献

鵜飼照喜，2000,「廃棄物問題と環境社会学の課題」『環境社会学研究』6：126-132.

川添登，2003,「ごみの歴史・ごみと文化」小島紀徳・島田荘平・田村昌三・似貝田香門・寄本勝美編『ごみの百科事典』，9-37.

寄本勝美，2003,『リサイクル社会への道』岩波書店.

Gregson, Nicky, 2011, *Living with Things: Ridding, Accommodation, Dwelling*, Wantage: Sean Kingston Publishing.